

市場、権力、精神

ドイツの哲学的作家エルンスト-ヴィルヘルム・ヘンドラー氏が、文学と哲学の結節点で認識を獲得するという彼の文学的手法を自ら紹介します。

朗読会、ワークショップ、ディスカッション

11月4日(火)朗読, 6日(木)ワークショップ, 8日(土)ディスカッション

東京ドイツ文化センター図書館 および早稲田大学

参加無料、要参加登録 ドイツ語と日本語

✉ machida@tokyo.goethe.org



1995年に短編集『家々のある町』でデビューして以来、ヘンドラーは、文学という手法で資本主義が、いかに人間の最も内面的なものへと押し入り、経済が我々の意識にいかに関与を与えるのかを探求しています。小説では、幸福や精神や愛を求める人間の営みに対立する経済と現代の労働生活の冷たいメカニズムが描かれています。2003年『もしも我々が死んだら』では三人のキャリアウーマンが登場し、自由経済の生き残りを賭けた戦いの中で自分を見失い、不幸な存在となっていきます。2013年の最新の小説『生き残る男』は、現在の監視社会と取り組んでいます。ある電子工学コンツェルンを実例にしながら、職員の映像が会議で録画され、メールが閲覧され、彼らの体が密かにポディスキャナーにかけられて検査されている状況が紹介されます。

朗読会: 2014年11月4日(火)19:00 東京ドイツ文化センター図書館

エルンスト-ヴィルヘルム・ヘンドラーが自身の小説『もしも我々が死んだら』と『生き残る男』から抜粋し、朗読します。

ワークショップ: 2014年11月6日(木) 15:00 早稲田大学

エルンスト-ヴィルヘルム・ヘンドラーによる現代のドイツ文学についての報告を受けて、早稲田大学独文科の教員および学生の方々が現在のドイツ語圏文学の作家たち、その主題、書き方について議論します。講演のタイトルは「人間は内部では行われぬ：現代のドイツ語の語り文学のために」となっています。講演テーマ：「人間は内部では行われぬ。現代のドイツ語の語り文学のために」

ディスカッション: 2014年11月8日(土) 16:00 東京ドイツ文化センター図書館

エルンスト-ヴィルヘルム・ヘンドラーは、哲学との結節点において文学を発見しています。2014年8月にはエッセー『認識手段としての小説についての試論』が出版されます。日本の哲学者たちがヘンドラーと共に、この論考とフリードリヒ・シュレーゲルの小説についての論考を比較しながら議論を展開します。

エルンスト-ヴィルヘルム・ヘンドラー略歴

レーゲンスブルクおよびミュンヘン在住。ミュンヘンで経済学と哲学を学んだ後、家族が所有するレーゲンスブルク近郊の軽金属会社の経営を引き継ぐ。企業経営と並行して著述活動を開始、1995年に最初の小説『家々のある町』を発表する。このデビュー作に続いて1996年に哲学小説『会議』、1997年に経済小説『転落』、1999年に建築小説『嵐』が出版され、2003年には『もしも我々が死んだら』が出版された。この作品は、SWR（南西ドイツ放送）のベストセラーリスト審査委員会によってこの年のベスト作品に選ばれた。2006年には『作家の妻』、2009年には小説『ガラスの世界』が出版された。この作品はこの年のドイツ書籍賞にノミネートされた。最新の小説は、2013年の『生き残る男』である。

ヘンドラーの中心テーマは当初からドイツの経済と労働生活であり、このテーマに一貫して文学的に取り組んでいる。他の作家達の声やレトリックが、彼の小説の重要な知的要素を形成している。最新作で扱われているテーマが、将来を指し示している。知性を備えたロボットという、人間的創造のラディカルなヴィジョンを実現するために、電子工学の工場の工場長は人間的なものをすべてを犠牲にしようとするのである。